

『日本アジア研究』第14号（2017年3月）

薛家将物語の生成と発展

—清朝宮廷演劇との関係を中心に—

大塚秀高*

薛仁貴の「征遼」を主題とする物語は当初その一部が雑劇として文字化されたにすぎなかったが、明代にはいるや、『薛仁貴征遼事略』さらには成化説唱詞話の『唐薛仁貴跨海征遼故事』といった、口頭の物語に近似した様態の「小説」としてその全体像を示すようになった。ところがこの薛仁貴征遼の物語は、その後、物語を史実に近づけ、王朝の興亡史として語ろうとする演義小説に組み込まれ、その精彩を失うに至った。この時期、薛仁貴を主人公とする物語は「伝奇」に新たな発展の場をみだし、仁貴の子として丁山を創作するなどして、後に薛家将物語となる新境地をみいだした。『金貂記』や『定天山』がそれである。この流れを承け、清朝宮廷の連台戯では、あまたの物語素を受け入れ、さまざまに変容した薛仁貴とその一族の物語が演ぜられた。同じころ、物語小説の出版が盛んになり、唐の太宗の天下統一の物語である『説唐全伝』を承け、薛仁貴やその子孫を主人公とする『説唐後伝』や『説唐三伝』が出版された。

キーワード：薛仁貴、薛丁山、薛家将物語、物語素、連台戯

まえがき

唐初の武将薛仁貴を始祖とする一族の活躍を描く作品（以下ではこれを「薛家将物語」と称する）は、戯曲と小説（以下、小説には俗文学作品も含める）の双方に残っているが、交互にその活発に創出された時期を迎えたようにみえる。これは物語にもとづく小説の歴史化（演義化）と密接に関わる現象であって、小説が演義化した時期の薛家将物語（に限らずすべての歴史物語がそうであったが）は戯曲、とりわけ長篇の伝奇にその発展の余地を求め、小説が口頭で語られた歴史物語に寄り添った（物語化）時期には、登場人物の数や場面に制約のある戯曲より小説にそれを求めたからである¹。とはいえ清朝にあって三層の戯台で演ぜられた連台戯については、登場人物の数や場面への制約が大幅に緩和されていたから、戯曲にして戯曲にあらざるもの、小説に類するものと認識すべきものであらう。

薛家将物語を演ずる雑劇に元・張国賓の『薛仁貴衣錦還郷』があり、元刊本な

* おおつか・ひでたか、埼玉大学名誉教授、中国俗文学

¹ 以上については、歴史化されることが、歴史物語が当時の購買層だった知識人を対象とする出版物となるための条件であった時代の小説が演義小説であり、印刷文化の大衆化により、物語が消耗品とみなされるようになった時代に、それを耳なれた人々を目当てに、さして手間をかけず出版された小説が物語小説である、と言い換えることもできよう。

らびに『薛仁貴榮歸故里』と題する『元曲選』本が残されている。両者の間には、曲辞やあらすじ、とりわけ第1折、第4折のそれに少なからざる相違が存するが、全体の流れは同じ方向にあるとみなせる²。この雑劇の舞台は遼東(左)の高麗で、鴨緑江とならぶ天陰に天山があげられていた。ただし「三箭定天山」をめぐる薛仁貴と張士貴の功名争いから第1折を始めているように、天山攻防戦そのものがそこで演ぜられることはなかった。雑劇の劇本という制約のしからしめるところでもあったろうが、張国賓の興味がもともとそこになく、薛仁貴の衣錦還郷、否、既存の衣錦還郷の物語に薛家将物語をあてはめ、薛、張の張りつめた人間関係を多面的に描くことにあったためであろう(正末が薛仁貴ではないうえ各折で異なっているゆえんである)。ともあれ、この雑劇の存在により、元代の薛家将物語がすでに「三箭定天山」を備えていたことがわかる。

雑劇としてはこのほかいずれも闕名撰とされる『摩利支飛刀対箭』ならびに『賢達夫龍門隱秀』の脈望館鈔本が残されており、『孤本元明雑劇』に収められている。元・闕名撰とされる前者は、題名を「薛仁貴跨海征東」、正名を「摩利支飛刀対箭」とし、薛仁貴を正末とするが、薛仁貴と摩利支(莫利支)蓋蘇文の飛刀対箭の場面は第2折と第3折の間におかれた楔子で演ぜられるに過ぎず、『薛仁貴衣錦還郷』の衣錦還郷の枠組を外し、薛、張の功名争いのみに焦点をあてた劇本とみなせる。後者の『賢達夫龍門隱秀』は明に入ってから以後に成立した可能性が高く、薛仁貴の妻柳迎春を主人公とする旦本で、薛仁貴征東の物語を故里に残された妻の視点から描こうとしたものといえる。『薛仁貴衣錦還郷』を含め、いずれも薛仁貴征東の物語の当時における盛行を前提に、そこに登場する人物の心理をその言動を通して描こうとした作品といつてよからう。

文人が制作に一定の関与をしたことが推測される雑劇に比し、演義小説が全盛を迎える以前の小説は、口頭の物語に淵源する要素の色濃い作品であった。口頭の物語は、主人公の如何を問わず、聴者(や読者、以下同様)の望み期待する要素(細部は時代により変化した)を厭くことなく繰り返す底のものであった(この要素を、その世界的な同一性を強調したい場合には説話故事類型とよび、その本源と民族ごとの特性を強調したい場合には神話素とよぶようだが、本論では物語において好んで使い回される点に着目し、「物語素」とよぶことにする)。薛家将物語を物語素の視点から分析した先行論文は寡聞にしてその存在を知らないし、本論にしてももっぱらその視点から薛家将物語を論じようとするわけではないのだが、薛家将物語に限らず、多くの物語小説、とりわけいわゆる家将小説とその周辺の戯曲にそれが目立つ点は指摘されるべきであろう。これが本論の執筆を思い立ったゆえんである。

一 『薛仁貴征遼事略』と『唐薛仁貴跨海征遼故事』

² 雑劇『薛仁貴衣錦還郷』については、高橋文治「元刊本『薛仁貴衣錦還郷』劇をめぐる」(『東方学』第76輯所収、1988.7)が詳細に論じている。なお西川芳樹「元代に於ける立身出世を描く作品群について—『薛仁貴征遼事略』を中心に—」(『日本中国学会報』第66集所収、2014.10)が「元明期の作品に於ける薛仁貴像」を紹介し、千田大介「薛仁貴故事変遷考」(『中国文学研究』第17期所収(1991.12)が平話系、詞話系、雑劇(北京)系に分け、薛仁貴物語の変遷を論じている。

元から明初にかけての時期が戯曲薛家将物語の時代なら、それ以降の明代半ばまでの時期は小説薛家将物語の時代といえる。現存最古の小説薛家将物語は『薛仁貴征遼事略』であり、成化説唱詞話の『唐薛仁貴跨海征遼故事』がこれに継ぐ（以下では『事略』と『故事』と略称する）。いずれも唐の太宗による高麗³（史実では高句麗）親征に従軍した薛仁貴が、立てた手柄をすべて上官の張士貴に横取りされながら、最後の最後に真実が明らかとなり報われるというものであって、おおすじにおいては張国賓の雑劇と変わらない。だが両者とも口頭で語られた物語に近い作品であり、戯曲と違い演出上の制約もなかったから、戦闘の描写に紙幅が多く割かれている点が異なっている。

『旧唐書』巻83（列伝33）ならびに『新唐書』巻111（列伝36）の薛仁貴の伝によれば、薛仁貴は貞観19(645)年の太宗の遼東親征に従軍したとされる。唐の高句麗遠征は太宗の死後も高宗によって継続され、薛仁貴は黒山で契丹と、天山で九姓鉄勒と戦い、天山では三矢で三人を射殺するなどの軍功をあげたとされる。龍朔元(661)年のことであった。唐と高句麗の戦いはその後も続いた。唐が莫利支蓋蘇文の死とその後継を争った二子の内訌に乗じかろうじて勝利を得たのは乾封元(666)年のことであった。言帰正伝、『事略』には『新唐書』の薛仁貴伝との関係が認められる⁴。だがそれに依拠したとまで断ずることはできそうにない。『事略』がもとづいた薛仁貴征東の物語と『新唐書』との間に『旧唐書』以上の関係が認められるといえるに過ぎない。

ひるがえって、薛仁貴征東の物語において唯一史書に見える「三箭定天山」であるが、『事略』や『故事』がもとづいた薛仁貴征東の物語ではその山場になっていたはずであるが、徐々に摩天嶺での薛仁貴と莫利支の「飛刀対箭」にその地位を奪われていったようだ⁵。長期に及び、各所に戦線が広がった史実の高句麗遠

³ 両者とも書名に「征遼」を銘打ち、本文で「高麗」討伐をいうが、遼は遼東ないし遼左（遼河の東岸、左岸）の意味で、宋と対抗した遼(947-1125)を指すものではなく、高麗も唐の太宗当時この地に建国していた高句麗を指している。物語には歴史的事実よりそれが語られていた時期の現実が反映される傾向があり、薛仁貴を主人公とする清朝の宮廷演劇にあつては高麗とすべきところを朝鮮とする例があった。『事略』(や『故事』)が高句麗を高麗とし、そこへの遠征を征遼と表現するのは、高麗(918-1392)、遼(947-1125)、西遼(1124-1211)が存続していた時期にそれが語られていたことを示唆しているように思われる。ちなみに高句麗を高麗と称する例は小説のみならず正統な史書にも見られる。

⁴ 『事略』掉尾の七絶「將軍三箭定天山，壯士長歌入漢關，永息煙塵清淨宇，太宗車駕却西還」の最初の二句は両『唐書』にも見えるが、『旧唐書』は壮士を戦士としている。ちなみに『資治通鑑』でも壮士であった。

⁵ 『故事』掉尾の七絶には「凜凜身軀胆氣雄，扶持唐世定遼東，能降海外烟塵靜，因在天山三箭中」とあるが、本文中に「天山三箭」の情節はない。その一方、「薛仁貴告御状」には「微臣去磨(マ)天嶺 国公署陣，憑手段 只三箭 定下烟塵」とあり、あたかも摩天嶺が天山の別称であるかのごとき言説がなされており、「飛刀対箭」は新たに加えられた淤泥河における太宗救出の場面に移されていた。ちなみに『事略』では薛仁貴と莫利支の「飛刀対箭」は「三箭定天山」（天山で戦うのではなく、莫利支の要請で救援にやってきた天山軍の三将、元龍、元虎、元鳳と戦うことになっている）に続く、これとは別の戦さでのこととされ、摩天嶺はこの二つの戦さ以前に遼三高相手に戦った地とされている。なお雑劇『摩利支飛刀対箭』は既述のごとく「飛刀対箭」を楔子におくが（場所は記されない）、第4折で「三箭定天山」が薛仁貴の功名として再三言及される

征を物語として語る際に、聴者にとってわかりやすいよう情節の選択や再構成がなされたであろうことは容易に想像がつく。のみならず、その際に既存の物語素を新たに組込むこともなされたに相違ない。『事略』で名ばかりの存在だった胡越城が、『故事』では三江越虎城にかわり、秦懷玉の「四門殺転」（以下このように仮称する）の舞台となったのがその好例である。以下ではこの秦懷玉の四門殺転の物語について検討したい。

遼東の海岸に上陸した太宗は三江越虎城に本営をおいた。知らせを聞いた葛蘇文はすぐさま出陣し、これを包囲する（これが空城計か否かは明記がない）。そこへ白袍将が登場し、包囲軍を蹴散らして城門までやってくる。白袍は実在の薛仁貴が混戦でも目立つよう身に着けた軍装だったが、薛仁貴征東の物語では、その正体の判明を遅らせ聴者の興味を逸らさぬためのさまざまな仕掛けが施されており、ここでは薛仁貴ならぬ秦懷玉だったとされる。太宗の駙馬の秦懷玉は、看護の甲斐なく亡くなった父秦叔保(叔宝)を悼むため白袍を身につけ、急ぎ太宗の後を追ってきたのであった。秦懷玉と気づいた太宗はすぐにも入城させようとする。だが秦叔保と先鋒を争った際に懷玉に恥をかかされ遺恨を持っていた胡(尉遲)敬徳により、西、北、東、南、再度西、北と四門を廻らされる。連戦で疲労し危機に陥った懷玉を葛蘇文の飛刀から護ったのが身につけていた孝縑で、飛び返った飛刀で負傷した蘇文は撤退し、懷玉は無事入城するとなっている。

以上に述べた三江越虎城における秦懷玉の四門殺転の物語は『故事』で新たに加わったものであるが、状況設定や登場人物は異なっても、構造は『趙太祖三下南唐被困壽州城』8巻53回の、「劉金定が高懷徳の子高瓊の後を追ひ、空城計によつて宋の太祖が閉じ込められてゐる壽州城にやってくる。だが戦闘で令箭を失つてゐたため入城を許されず、次々と四門を廻らされ、最後に南唐の軍師余鴻と戦ふ。妖術を駆使して金定と戦ふ余鴻だったが、金定の采旗で飛刀の能力が失われ、その打仙鞭に脅威を感じて逃げ出す。かくして金定は壽州城への入城を許される」という物語そのままであった（『趙太祖三下南唐被困壽州城』については筆者の別稿⁶を参照されたい）。つまり四門殺転は物語素のひとつであつて、『故事』はその主人公を若武者の秦懷玉に、『趙太祖三下南唐被困壽州城』は女将の劉金定としたものだったのである。後者が主人公を女将としたのは、それが巷間で語られていた時期には女将が活躍する物語がもてはやされていたことを反映したものであつたろう。両者の相違はこれ以外にも大小様々認められるが、それらは物語素の可変部分に加えられた変更とみてよかろう。ちなみに懷徳と懷玉は諱の一字を共通にしており、ともに駙馬であつた。『故事』と『趙太祖三下南唐被困壽州城』では前者の成立時期の方が古いが、後者が前者を襲つたとは必ずしも言えまい。両者は同一のルーツ（物語素）から異なる時期に発芽した二輪の花とも称すべきものであつたろう。

もうひとつ、同一の物語素によりながら、踏襲関係も考えられる例を説唐物語シリーズから挙げておこう。『故事』に見える、薛仁貴が淤泥河で太宗を救出す

から、天山が「飛刀対箭」の地に設定されていた可能性が高い。

⁶ 「歴史物語の生成と発展—高家将物語を中心に」（『埼玉大学 紀要教養学部』第51巻第2号所収、2017.3）を参照されたい。

る一段（以下「淤泥河」と仮称する）がそれである。この物語は後日刊行された『説唐演義後伝』不分巻 55 回（以後『説唐後伝』と略称する）の第 42 回「雪花鬚飛跳養軍山 応夢臣得救真命主」に受け継がれているが、『説唐演義全伝』不分巻 68 回（以後『説唐全伝』と略称する）の第 62 回「羅成魂帰見嬌妻 秦王恩聘衆将士」にも、羅成が殷、斉二王に陥れられ、淤泥河の泥濘に嵌って身動きできなくなり、蘇定方の部下に射られて死ぬとして使われていた。羅成の死は『説唐全伝』以前に刊行された物語小説、諸聖鄰の『大唐秦王詞話』8 巻 64 回⁷の第 50 回においても同様に語られているが、嘉靖 32(1553)年に楊氏清江堂から刊行された熊大木の演義小説『唐書志伝通俗演義』8 巻 89 則では、羅成ならぬ羅士信が、愛馬が泥濘ならぬ雪坑に脚を取られたため捕えられ処刑されるとなっている（第 49 則）。物語素の可変部分を意図的に改変したものであって、熊大木の工夫にでるものであったろう。

かくて羅成は悲劇の英雄として死ぬのだが、太宗のような王朝の創始者が主人公の場合はそうはゆかず、薛仁貴のごとき救い主が出現するか、主人公こそが天命の持主であると見抜いた追手の将に有怨されることになっていた。ちなみに前者の救い主は人間とは限らない。檀溪で劉備を救った的盧がそれである。後者の例としては、後に宋の太祖となる趙匡胤を楊業が有怨する『南宋志伝』10 巻 50 回や『飛龍全伝』不分巻 60 回の例、同じ状況で楊業の父楊褒が有怨する清朝宮廷連台戯の『欣見太平』や『下河東』の例がある。現存するこうした作品の刊行（ないし鈔写）の時期はすべて『故事』のそれ以降であるが、いずれも同一の物語素に出自を有するものであり、物語が文字化されるか否か、文字化される際の時期の先後は多分に偶然に左右されたから、このうちのいずれかを祖形と決めることは出来ない。

明初に編纂された『永楽大典』に収められた『事略』、成化(1465-87)年間に北京の永順堂から刊行された『故事』に続く薛仁貴征東の物語には、嘉靖 32(1553)年刊行の楊氏清江堂本を源流とする熊大木の『唐書志伝通俗演義』、万暦己未(1619)刊行の金閨書林龔紹山本が現存する『隋唐兩朝志伝』12 巻 122 回があるが、いずれも史実に近づけることを旨に編纂（ないしそれをさらに改作）した演義小説であって、薛仁貴のみに焦点をあてているわけでもないから、本論では必要に応じ言及するに留めたい⁸。ちなみに『唐書志伝通俗演義』ではその第 77-89 則に、

⁷ 諸聖鄰は万暦のひととされる。『大唐秦王詞話』には目録題に「重訂」、本文題に「按史校正」を銘打つ鄭振鐸旧蔵明刊本があり、文学古籍刊行社から影印(1956.7)された。羅貫中の『小秦王詞話』を改訂したものとの説があるが、さだかではない。

⁸ ほかに康熙 34 年序を冠する楮人獲の『隋唐演義』20 巻 100 回があるが、この系統の呉門恂莊主人の『異説征西演義全伝』40 巻 40 回や『薛家将平西演伝(混唐後伝、混唐平西伝、大唐後伝)』8 巻 32 回巻首 5 回とともに本論では論じない。なお咸豊 10 年の梁朗川序を冠する『瓦崗寨演義全伝』5 巻 20 回は『説唐全伝』の前半を析出し小補したものというから、『説唐後伝』の『説唐小英雄伝』にあたるものとみなせよう。『異説反唐演義全伝(異説南唐演義全伝、反唐女媧鏡全伝、中興大唐演義伝、薛家将反唐全伝、武則天改唐演義、大唐演義鉄墳坵全伝)』10 巻 100 回は『説唐三伝』の後半を詳説したものとおぼしいが、未見につき、演義小説と物語小説のいずれに属するかの判断は保留したい。ちなみに筆者の所蔵する安順地戯の劇本の複印本に『大反山東』『四馬投唐』『羅通掃北』『薛仁貴征東』『薛丁山征西』『薛剛反周保唐』『粉粧楼』を題する孔版本がある。これは文革で破棄された地戯の劇本を後日説唐シリーズなどによって復元し

『隋唐兩朝志伝』ではその第 83-93 回に薛仁貴が登場している。

二 『薛仁貴跨海征東白袍記』と『薛平遼金貂記』

明の万暦(1573-1620)以降にあって、薛仁貴征東の物語が新たな発展をみせたのは長篇伝奇の分野においてであった。金陵の富春堂が万暦年間に刊刻した、いずれも無名氏撰とされる『薛仁貴跨海征東白袍記』ならびに『薛平遼金貂記』がそれである(以下では『白袍記』ならびに『金貂記』と略称する)。薛仁貴やその子の丁山を主人公とする長篇伝奇は以降も文人によって編纂されたが、それらは必ずしも出版を目的とはしていなかったようであるし、禁書の取り締まりが厳しい清朝前期のものであったから、孤鈔本が残されている場合がほとんどであって、巷間の薛家将物語に影響を与えたとは思えず、むしろその影響を受けている可能性が考えられよう。

これに対して、清朝の宮廷連台戯で演ぜられた薛家将物語は、当初は文人が編纂に関与していた可能性はあっても、清朝後期の道光 7(1827)年以前においては南府や景山、それ以降は昇平署の学や班の演出家が編劇に携わっていたはずで、民間の俳優も宮廷に招かれ上演に参加していたから、当時巷間に流布していた薛家将物語の影響を受けることも、逆に影響を与えることもあったはずである。だが連台戯の劇本も孤鈔本、それも不完全な形で残される場合がほとんどであり、鈔写(すなわち成立の下限)の時期すら明らかでない場合が多かったから、その成立順については一応の目途はついて、成立時期を確定することはむずかしい。よってそれらの成立時期については清末、おそらくは光緒年間(1875-1908)にまで下る可能性を認めたうえで、乾隆年間に刊行された説唐シリーズに言及するに先立ち、長篇伝奇に続け、筆者の考える成立順により順次以下で紹介してゆくことにしたい。

『白袍記』2 卷 46 齣(『古本戯曲叢刊』初集所収)の劇情は『事略』と『故事』のそれを継承したものといえるが、『金貂記』4 卷 42 折(『古本戯曲叢刊』初集所収)はその後日譚を扱っており、それらと異なる。すなわち、衣錦還郷した薛仁貴が皇叔李道宗のワナにはまり、功績で罪を贖うとて葛(嗑)蘇文の甥で西涼(遼)に逃れその大元帥となっていた蘇保童の討伐に派遣され鎖陽城に閉じ込められるが、子の丁山に救出され、そろって凱旋するというものであった。この『金貂記』、富春堂本の巻頭に冠される元末の楊梓による雜劇『功臣宴敬徳不伏老』一尉遲敬徳による高麗の鉄肋金牙討伐一の高麗を西涼(遼)に、敵対者を鉄肋金牙から蘇保童にかえ、主役を尉遲敬徳から薛仁貴、丁山の父子に改め、敬徳にはその援助者の役割を与え、丁山に敬徳の女を娶らせるなどしたもので、万暦 21(1593)年以前

たものとされるが、説唐シリーズに見えない情節も含まれているという。上田望「清代英雄伝奇小説成立の背景」(『日本中国学会報』第 46 集所収, 1994.10)ならびに金文京「貴州農村市場における書籍の伝播」(森利彦編『中国近代の都市と農村』所収, 京都大学人文科学研究所, 2001.3)を参照されたい。安順地戯の劇本は帥学剣の整理校注本(貴州民族出版社, 2012.6)が出版されているが、孔版本との比較が未完なため、機を改めて論じたい。

の刊行で、それ以前に旧本が存在した可能性が指摘される長篇伝奇であった⁹。

案ずるに、『金貂記』で演ぜられる薛仁貴の西涼(遼)蘇保童討伐の物語は、もともと元末以前に巷間に流布していた尉遲敬徳の不伏老の物語を換骨奪胎し、そこで敵対者だった李道宗のメイン・ターゲットを尉遲敬徳から薛仁貴にかえ、これに仁貴とその妻柳氏ならびに新たに登場させた子の丁山を迫害させ、女仙(李翠屏)が孝子(丁山)を援けて手柄を立てさせるという趣向を加え、『事略』や『故事』が高麗遠征を征遼といいなしているのを逆手にとり、討伐の対象を実在だが薛仁貴の頃には存在しなかった西遼に改め、「天山三箭」にかえ鎖陽城解放戦を新たな山場にするなどしたものとなせる。それならこの荒唐無稽な物語の成立時期は西遼滅亡以前もしくはその後まもなくまで遡るのか。案ずるに、雑劇『功臣宴敬徳不伏老』がその土台にある以上、そうした可能性は高くあるまい。

ちなみに雑劇『功臣宴敬徳不伏老』が高麗の大將鉄肋金牙を登場させ、富春堂本『金貂記』が西涼(遼)の大元帥蘇保童を登場させていることは既述したが、清朝宮廷連台戯の『金貂記』ではそれが高麗の鉄勒金牙として復活していた(後述)。案ずるに、鉄肋は金の牙(齒)に対応し鉄の肋骨を意味するが、もともと天山の九姓鉄勒、すなわちチュルクから変わったものであったろう(正しくは鉄勒が鉄肋にかわり、それから金牙が連想されたはずであるが)。雑劇『功臣宴敬徳不伏老』の成立時期が元末明初であったなら、そこに薛仁貴征東の物語の枠組みを襲いつつ、大將の名を葛(嗑)蘇文とせず鉄肋金牙とした点に作者楊梓の元ないし北元討伐を鼓吹せんとする隠された意図をみることも、あるいは可能であるかも知れない。

三 清朝宮廷で演ぜられた『金貂記』

『金貂記』は清朝宮廷でも演ぜられており¹⁰、「智取鳳城」を山場とする単齣

⁹ 郭英徳編著『明清伝奇綜録』(河北教育出版社, 1997.7)による。李修生主編『古本戯曲劇目提要』(文化芸術出版社, 1997.12)をも参照されたい。ちなみに富春堂本『金貂記』がその巻頭に雑劇『功臣宴敬徳不服老』を収録したのは、『金貂記』の第3折後半から第9折の欠落(巻1の第5〜末葉、巻2の第1〜4葉)を補填する意図によるとおぼしく、雑劇を残すために伝奇の一部を削ったのではあるまい。なお、呉曉鈴旧蔵で「富春堂原本」、「飲流軒校訂」を銘打つ鈔本『金貂記』2巻34齣が現存する(巻頭に「丙寅六月許飲流記」の序文が附される)が、これと富春堂本とを比較すると、前者では後者の第11、24、30、33、38の5折がなく、第1折が開場にかわり、第18、19折、第25、27折が統合されるなどし、曲辞も洗練されている。一方、富春堂本が欠く第3折後半から第9折に相当する齣を第3〜8齣として収めている。両者の関係については機を改めて検討する必要があるだろう。ちなみに許飲流は許之衡、字守白のこと。生卒年は不詳だが、民国壬戌(11, 1922)の2巻40齣からなる『霓衣裳豔』伝奇や『飲流齋説瓷』がある。先の丙寅は民国15(1926)年であろう。なお、劇本の構成単位である齣、出、折や段、本についてはそれぞれの原表記によった。登場人名の異表記についても同様であるが、寶を豆とするような明らかな略表記は本字に直している。

¹⁰ 清朝宮廷で演ぜられていた『金貂記』については、柴崎公美子「清朝宮廷演劇における「薛丁山」物語の受容—「金貂記」物語の変容を通じて—」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第11号所収, 2014.3)がある。本論におけるアルファベットの略称は柴崎

戯(C)と、連台戯の「截賢受困」に終わる第2段(B)ならびに「猷表班師」に終わる末段(A)が現存している。ふたつの連台戯の片段については同一バージョンのものとみて差し支えないようだが、単齣戯はこれと明らかに異なるバージョンのものといえる¹¹。これらの『金貂記』の劇情は、いずれも富春堂本のそれとは相当異なっていたとみなせる。ちなみに清朝宮廷で専ら『金貂記』を演じていたのは外二学のように、上記の『金貂記』にはいずれにも「旧外二学」の印が捺されていた。

このうち末段(A)には姣鸞なる高麗公主が登場し、曲辞やセリフにも高麗が頻見する。のみならず第8齣の薛仁貴のセリフに「吾当奏聞聖上、命汝永鎮東方、世為朝鮮国王」とあった。さらに第5齣の出隊子の曲辞には「今日里不斬婁蘭(楼蘭)誓不回」とあり、富春堂本の鎖陽城、蘇保童が消え、かわって天山と『功臣宴敬徳不伏老』に登場した鉄肋金牙が鉄勒金牙として復活登場していた。しかも薛丁山の妻としてあまねく知られる樊梨花も新たに登場していた。樊梨花が登場する薛家将物語としては、後述するいずれも乾隆年間に刊行された呉門恂莊主人の『異説征西演義全伝』40巻40回ならびに中都逸叟の『征西説唐三伝(別名異説後唐伝三集薛丁山征西樊梨花全伝)』10巻88回(以後『説唐三伝』と略称する)が知られるが、これ以前に樊梨花を登場させる作品は管見では存在しない。ところがこの二作品に登場するのは鉄勒金牙でなく蘇保童(宝同)であった。よって(A)が末段の連台戯は乾隆帝の御前でその十全武功を寿ぐとともに、そこに陪席していたはずの李氏朝鮮の燕行使を威服させる意図により新たに編劇されたものであって、その時期は上記二つの小説の刊行以降と考えることが可能であろう。

この(A)と同一ないしは同時期の連台戯の劇本と思われるものが(B)第2段である¹²。だがそこには姣鸞公主や樊梨花が登場する場面はなく、それと断ずることができない。しかも(B)は康熙帝の諱玄燁の玄を避諱しておらず、順治以前のものの可能性も否定できない。ただ「高鳥尽良弓蔵」とすべきところを「高馬尽良弓蔵」としているように、原鈔本ではないと思われるから、玄の不避諱については転写の際の失誤にその原因を帰すことができるかもしれない。

(C)の単齣戯には高麗公主が登場する。だが名を華英(天喜星)といい、幼いころ碧霞元君にさらわれ修行させられていたが、時満ちたとて師命で帰国し、唐軍の程螭虎(程咬金の子で黒虎星)と夫婦になるとされている。よって既述のごとく(C)は(B)や(A)の連台戯グループとは明らかに異なる設定の『金貂記』の一部であって¹³、(Db)、(Dc)はこれと同一または近似の劇情のものと推定される((Da)はどちらのグループのものであっても差し支えなさそうだが、おそらく(C)のグループに属するものであろう)¹⁴。ちなみに(C)と(Dc)には樊梨花が登場する。よって(C)、(Db)、(Dc)のグループも乾隆以後のものであり、私見では先の連台戯より

論文のそれを踏襲している。

¹¹ 前掲注10の柴崎論文は「旧外二学」の印が捺された『唐伝』の「建王言婚等八齣」(Db)、「国戚郊遊等八齣」(Da)、「大擺五行等八齣」(Dc)も『金貂記』の一部と指摘する。登場人物や「旧外二学」の印によるなら、これらは(C)と同一バージョンのもののようなのである。

¹² 表紙にはともに「吉」の字が見える。

¹³ たとえば(A)では姣鸞公主が先天五行八卦陣を、(Db)では華英郡主が五方奇陣を敷く。

¹⁴ 前掲注10の柴崎論文に詳しい。

後のものということになる。なとなれば、華英郡主が陣前招親すべき相手は薛丁山だったはずであるが、丁山に樊梨花がいる以上、観客であった宮廷の女性の好みであった陣前招親の趣向を実現させる状況にはなかった。それゆえその相手として新たに登場させた人物、それが程螭虎であったと考えられるからである。既述のごとく(A)、(B)、(C) (及び(Da)、(Db)、(Dc)) の『金貂記』(及び『唐伝』) にはいずれも「旧外二学」の印が捺されていた。よって三者とも乾隆時景山または嘉慶時南府いずれかの旧蔵本であって、景山と南府が昇平署に統合再編される道光7年以前に鈔写されたものということになる(旧蔵印は南府や景山の劇本が昇平署に引き継がれる際に捺されたはずだから)。薛家将物語が消費され、新たな物語が紡ぎだされるスピードは思いのほか速かったようだ。

四 清朝宮廷で演ぜられた『定天山』と古呉鉄笛道人の『定天山』

清朝宮廷で演ぜられた薛仁貴征東の物語を扱う単齣戯としては、『金貂記』以外に『定天山』を銘打つ總本(全8齣)が二本現存している。『中国国家図書館蔵清宮昇平署档案集成』(中華書局, 2011.5)所収の昇平署旧蔵鈔本と『俗文学叢刊』第1輯(新文豐出版社, 2001.10)所収の中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館蔵鈔本がそれである。いずれも第8齣を「三箭天山」とし、登場人物や地名を同じくするから同一の、おそらく『故事』またはそれに近い薛仁貴征東の物語を上演するための總本とみられる。とはいえともに『故事』の全体をカバーするものではないし、構成も同じではないから、異なる時期に同一の連台戯から再編集された總本であって、連台戯の上演が難しくなった時期、あるいは連台戯として上演しない場合の劇本とみられる。

それならこのふたつの總本の成立の先後はどうなっているのか。両者とも第8齣を窮地に陥った高麗国が救援を求める使者を天山の金勒、銀勒、鉄勒に送り、薛仁貴がこれを三箭で打ち負かすとしているのだが、前者に登場する男装の高麗郡主が後者に登場していたかがさだかでない(後者にも使者は登場するのだが、前者の「改粧求救」にあたる齣がないため、それが男装の公主か判然としないのである)。

それならこのふたつの總本に先立つ連台戯があったとした場合、そこに高麗郡主は登場していたのか。そもそもその全体の劇情はどうなっていたのか。『金貂記』の場合と異なり、連台戯『定天山』は部分的にも残っていない(言い換えれば連台戯『定天山』が存在した確証はない)のだが、その劇情を推知しうる劇本なら現存している。「古呉鉄笛道人填詞」を銘打つ2巻26齣からなる鈔本¹⁵がそれであり、台北の故宮博物院に蔵されている。

この2巻本『定天山』であるが、上下巻とも『白袍記』『金貂記』を綯い交ぜにしつつ、上巻掉尾の第14齣を「箭定天山」、下巻第19齣を「淤泥救主」とすることにより『故事』に近づけ、上下巻を一連の薛仁貴征東の物語とすべく、『金貂記』の西涼(遼)や蘇保童については高麗、蓋蘇文に改めるなどしたものとおぼ

¹⁵ 書誌事項は張棟華『善本劇曲経眼録』(文史哲出版社, 1976.6)に詳しい。

しい。それゆえ富春堂本にみえる鎖陽城や李道宗による仁貴一家ならびに李翠屏迫害の情節は削除された。高麗公主も登場するが姣鸞でも華英でもなく宝珠とされ、丁山に簡単に捕えられ、皇恩によりその妻となるとなっている。この変更は、2 巻本『定天山』が女将による陣前招親の趣向が一世を風靡していた時期に、その俗套に墮することを嫌った文人の手になるものであることを示唆しているようにみえる（古呉鉄笛道人によるその他の変更については後述したい）。

ではこの2 巻本の成立時期はいつごろか。上巻の劇情は『曲海總目提要(原名『樂府考略』)』巻36の「定天山」に紹介されるそれと一致する。割注に記される詳しい劇情は2 巻本のそれそのものだが、『樂府考略』が『曲海總目提要』と名称変更された際に董康により2 巻本にもとづき書き込まれたものとおぼしく、「清鉄笛道人撰、名里待考」の割注は人民文学出版社編輯部により附されていた¹⁶。だが下巻の劇情は「定天山」に続けて著録紹介される「金貂記」（すでに紹介した富春堂本によるか）本文のそれとは明らかに異なっている。しからば『曲海總目提要』に提要が記されている「定天山」はこの2 巻本の上巻のみを対象にしたものであって、下巻部分は当時まだ存在していなかったか、『樂府考略』の編者の目に入っていなかったとみてよさそうである。では『曲海總目提要』に名称変更される以前の『樂府考略』はいつごろ編纂されたのか。通説では康熙末年(1722)までに成立したことになる。しからば2 巻本『定天山』、少なくともその下巻の成立はそれ以降となろう。

ひるがえって2 巻本『定天山』上巻の山場である第14 齣「箭定天山」と、ふたつの単齣戯『定天山』の第8 齣「三箭天山」の曲牌、曲辞を比較すると、2 巻本、昇平署旧蔵本、傅斯年図書館蔵本の順に成立したことがわかる¹⁷。よって三種の抄本はこの順に、いずれも康熙末年以降に成立したことになる。ちなみに2 巻本では天山の三怪人は鉄勒島の金勒、銀勒、烏賽神となっていた。

五 古呉鉄笛道人とその修改

次に古呉鉄笛道人について考えてみたい。莊一弘¹⁸や郭英徳¹⁹は古呉鉄笛道人を周淦、字漁村、江蘇長洲人とする。古呉鉄笛道人を周淦とする説は呉曉鈴に端を

¹⁶ 『曲海總目提要』は民国17(1928)年6月に大東書局から書名をかえ排印出版される際、董康、王国維、呉梅、陳乃乾、孟森の五名により一卷ごと順繰りで校訂されている。巻36の冒頭には「江都黃文暘原本、武進董康校訂」とあった。人民文学出版社はこれを1959年に重排出版する際、「出版説明」によれば、*により作者に関する割注を加えている。

¹⁷ ちなみに2 巻鈔本第14 齣の曲牌は、順に神仗兒、北点絳唇、北醉花陰、南滴金、北喜遷鶯、南滴溜子、北四門子、南双声子、北水仙子、北煞尾に、昇平署旧蔵鈔本第8 齣の曲牌は、神仗兒、点絳唇、醉花陰、画眉序、喜遷鶯、滴溜子、四門子、双声子、尾声に、傅斯年図書館蔵鈔本第8 齣の曲牌は、点絳唇、醉花陰、画眉序、喜遷鶯、滴溜子、四門子、双声子、煞尾となっている。なお三者末尾の北煞尾、尾声、煞尾は曲辞がまったく異なるが、他の同名曲牌の曲辞には関連性が見いだせる。

¹⁸ 『古典戯曲存目彙考』(上海古籍出版社, 1982.12)。

¹⁹ 前掲注9の『明清傳奇綜録』。

発する²⁰が、その根拠はすこぶるあいまいである。呉曉鈴説が成立するには、周湊の名が見える『定天山』の劇本が存在し、それが2巻本と一致するか、鉄笛道人を号する周湊が『定天山』の成立に関わったとする確実な資料がなければならぬのだが、そうした劇本も資料も管見では存在しないようである。鄧長風によれば²¹、「長洲周漁村湊，字東田…又号鉄笛道人」なる人物が実在し、生存時期は「大致生於乾隆初，活動於乾、嘉、道三朝；他決不能生活於康熙時期」であるという。前述のごとくこれだけではこの周湊鉄笛道人が2巻本『定天山』を填詞した古呉鉄笛道人であるとはできないのだが、時期と籍貫はその資格を満たしているといえる。そこでこの周湊鉄笛道人と古呉鉄笛道人をとりあえず同一人と認めたうえで、「定天山」を銘打つ劇本の蛻変過程につき、以下で考察してみることしたい。

古呉鉄笛道人周湊が乾隆年間以降に、上巻部分については『曲海總目提要』のごとき劇情の無名氏²²の『定天山』に依拠し、続く下巻部分については『事略』、『故事』、富春堂本系の『金貂記』などにもとづき新作し、2巻本『定天山』とした。その際、上巻に下巻の伏線を書き加え、上下巻の整合性を増すようはかった。これが「古呉鉄笛道人填詞」と上下巻の巻頭に記したゆえんであったが、劇名を新たなものに変えることはしなかった、と。

次は当然その伏線と整合性について述べるべきなのであるが、それに先立ち、2巻本『定天山』の曲牌にみえる南北の表示について考えておきたい。2巻本の曲牌には、単齣戲のそれと異なり、南北いずれかの文字が付されているものがある。同様な状況は富春堂本『金貂記』ならびに『金貂記伝奇』、さらには清朝宮廷連台戲の、大阪府立中之島図書館所蔵の乾隆前期²³四色鈔本『昇平宝筏』や嘉慶18年に朱墨套印された『昭代簫韶』などにもみえている。この『昭代簫韶』の凡例八には「南北合套之詞，如呂入双角，係兩宮合套，必用南北二字標於牌名之首。如中呂宮、中呂調、黄鐘宮、黄鐘調等合套之曲，係本宮本調，則以宮調為別，不載南北二字」との記述があった。また北套曲188套、南北合套36套などを収める『九宮大成南北詞宮譜』の刊行（朱墨套印）は乾隆11年であった。清朝宮廷演劇の音楽は民間演劇との交流をうけ徐々に皮簣化される傾向にあり、清末には南北の相違どころか曲牌の表示すらされなくなるのだが、それについてはここでは論じない。南北の表示のある曲牌を含む齣は『昇平宝筏』が全240齣中16齣、『昭

²⁰ 呉曉鈴の「国立中央研究院歴史語言研究所善本劇曲目錄」（『呉曉鈴集』第2巻所収，河北教育出版社，2006.1）に下記のごとき記載がある。

《定天山》伝奇不分卷八齣 清周湊撰 昇平署黄皮精抄本。半頁八行，行二十字，一冊。

按：此劇撰者無考，《曲錄》入無名氏部中，《曲海總目提要》卷三十六載之。北平図書館蔵抄本署“鉄笛道人”，今従之。

²¹ 『明清戲曲家考略統編』（上海古籍出版社，1997.1）所収の「十位清代蘇州戲曲家生平考略」の「周湊」による。

²² 『曲海總目提要』の本文には「不知誰作」とあった。当然この無名氏が周湊である可能性もある。

²³ 磯部彰「大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』解題」（『大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』』第一本所収，東北大学出版会，2013.3）による。

代簫韶』が全 240 齣中 5 齣²⁴であったのに対し、2 巻本『定天山』では全 26 齣中、1、4、5、8、13、14、15、17、25 の 9 齣であった。しからば、鉄笛道人が古呉の人ゆえ南北の表示に厳格だった可能性はあっても、2 巻本の成立時期については『昇平宝筏』の刊行前後、その比率からみておそらくそれ以前、『九宮大成南北詞宮譜』刊行の頃まで遡る可能性を考えてもよいのかもしれない。

言帰正伝、古呉鉄笛道人が 2 巻本『定天山』の上下巻を一体化させるべくおこなった改変には次のようなものがあつた。2 巻本は上巻第 1 齣を「仙師遣虎」とし、ここに薛丁山を登場させたうえ、黄禪仙師がその意を体した虎にこれをさらわせ手元で修業させたことにし、下巻第 20 齣「遣子救父」で再登場させ、張士貴らにより窮地に陥った父の救出におもむかせることにした。李道宗を張士貴以上の悪人とし、上下巻にあまねく登場させたのもこれと同様の意図に出るものとみてよからう。

既述のごとく「三箭定天山」は本来の薛仁貴征東の物語の山場であつたのだが、『故事』はもとより『白袍記』にあつてもすでに名のための存在となつていた。それが『定天山』で異なる意味づけをされ蘇ることになった。『曲海總目提要』の「定天山」本文に見える「仁貴訴十大功劳、帰結于三箭定天山。按天山在西北塞外，劇即并入高麗，亦非也」の一文は、天山が『楽府考略』の編者にとり実在の西北塞外の天山（天山山脈）にほかならず、『事略』で高麗が救援を求めた射鵬王頡利可罕の本拠とされた天山ではなく、両『唐書』が九姓鉄勒と薛仁貴の戦場とした天山であつたことを示している。詞話であつた『故事』はいざ知らず、『事略』がこの当時巷間に流布していたとは思えないし、『曲海總目提要』に『白袍記』ならぬ『定天山』が著録されていたことに鑑みるなら、富春堂本の『白袍記』もすでに稀観本となつていたはずである。とはいえ薛仁貴征東の物語自体が巷間から消えていたはずはなかろう。だがそこで「三箭定天山」がどのように語られていたかはわからない。だから 2 巻本『定天山』を目にした何者かがそれに新しい意味づけをすることはありえよう。なぜなら乾隆年間には唐朝の太宗皇帝ならぬ清朝の高宗乾隆帝による相継ぐジュンガル親征がなされており、それを寿ぎ、李氏朝鮮をはじめとする朝貢使を陪席させた宴席でその武功を誇るべく上演するに相応しい新作劇本がしきりに求められていたはずだからである。かくして天山は薛仁貴の高麗遠征において語られながら、本来の西域の天山の姿を取り戻し、薛仁貴に三箭で平定される相手も 2 巻本の鉄勒島の金勒、銀勒、烏賽神から、清朝宮廷で演ぜられる『定天山』では海島の金勒、銀勒、鉄勒とかわつたのである²⁵。

²⁴ 拙論『昭代簫韶』と楊家将物語（磯部彰編『清朝宮廷演劇文化の世界』所収、東北大学東北アジア研究センター、2012.12）の 8-9p を参照されたい。

²⁵ 『定天山』の金勒が『金貂記』の鉄助金牙からの連想であり、銀勒が金勒から連想であることはまず間違いない。2 巻本『定天山』が三人目を鉄勒とせず烏賽神としたのは、鉄勒をすでに島名として使ってしまったからであり、単齣戯の『定天山』は鉄勒を三人目とするため、島については単に海島としたのであろう。なお『唐書志伝通俗演義』第 87 節に、高麗が救援を求めた北部種落鉄勒国九姓の万三聖（万留公、万濟公、万通公）を薛仁貴が三箭で射殺する情節があり、万三聖に指揮される八姓に烏賽神がいるとされる。2 巻本の烏賽神はこれを継承したものであろう。ちなみに中国では東西南北に海があると認識されていたから、西方に海島があるとされても違和感はなかったであろう。

六 『定陽関』と『西唐伝』頭段

ひるがえって富春堂本『金貂記』には遼賊により薛仁貴が閉じ込められることになっている鎖陽城が初めて登場している（第21折）。この鎖陽城、いかなる経緯で薛仁貴物語に登場することになったのか。

甘粛省の敦煌県と安西県の間に鎖陽城鎮がある。この鎖陽城鎮、鎖陽城の遺址とされる故城址があることによりかく命名されたという。ではその鎖陽城の正体は何か。唐代の瓜州で、明代に放棄された故城址という。瓜州は康熙末年のツェワンラプタンの叛乱平定後に安西県に改められ、2006年に瓜州県となった。放棄された時期はさだかでないが、その頃から康熙末年までは忘れられた存在であったことに間違いあるまい。それが鎖陽城と呼ばれるようになった時期もさだかでないが、当地では薛仁貴が哈密の元帥蘇宝童に閉じ込められた地と言い伝えられているようである。当然『説唐三伝』もしくは後述する『西唐伝』以降の言説に相違ない。唐の太宗や薛仁貴はもちろん、清の聖祖康熙帝にしてもそこに閉じ込められたなどという史実はなかった。しからば康熙帝によるツェワンラプタン征伐以後、瓜州故城の存在が俄然脚光を浴び、康熙帝を称え寿宮の連台戯で鎖陽城として蘇ることはありえよう。その場合、鎖陽城の陽は皇帝を象徴するものと理解されていたに相違ない。

ところが明の万暦年間に刊行された富春堂本『金貂記』にすでに鎖陽城が登場しており、そこに太宗は登場していないとなると、明代の薛仁貴物語における鎖陽城の意味は「陽を鎖す城」ではなく「陽城に鎖さる」だったとみるのが自然であろう。

ひるがえって、陽城といえば王維の「送元二使安西」の詩の陽関が連想されたはずである。しからば富春堂本の作者の念頭に陽関があり、それを必然的に連想させる鎖陽城が薛仁貴の閉じ込められる地の名に選ばれたのではなかったか。富春堂本『金貂記』第19折の小生（薛丁山）の曲辞に「慮只慮玉関遠涉」とあるが、この玉関が玉門関を指すことまた言を待つまゐ。陽関、玉門関とも敦煌の西にあり、唐代においてはその西の果てと意識された、西域南道と西域北道（天山南路）の要衝であった。しからば富春堂本系の『金貂記』を目にした清朝宮廷の劇本制作者が「奇貨居くべし」とばかり、鎖陽城を縁起のよい定陽城(関)に改めるなどし、まずは『定陽関』として演じたとしても不思議はあるまい。

『定陽関』の劇本としては「旧大班」の印記が捺された全8齣からなる昇平署旧蔵の単齣戯鈔本（串関）が唯一現存している。しからば前述の清朝宮廷の劇本制作者は旧大班所属だった可能性があろう。劇情は、哈蜜国に遠征し蘇海字宝童により定陽城(関)に閉じ込められた薛仁貴を、師の王蟬(禅) 老祖(大仙)の命で下山した子の丁山が救うというものであるが、単齣戯であるため、丁山が王蟬老祖のもとで修業するにいたる経緯については演ぜられていない。

『定陽関』でも『金貂記』の鎖陽と同様、定陽が地名扱いされているが（兵到定陽）、既述のごとく、「定天山」と同様、陽関を定めるという賀意を込めての命名と推される。ト書きに「天井下飛刀」とあるから、三層の戲台とまではいえなくても、「天井」のある戲台で演ぜられていた劇本に相違ない。ひるがえって宮

廷演劇の劇本には飛刀で闘う場面が頻出するが、それはそれが「天井」のある戲台で演ぜられたからであつたろう。「天井」はそもそもそうした場面などを演出するために設置された仕掛けだったのだが、後には趣旨が逆転し、「天井」を使うため、劇情に必ず飛刀で闘う場面が組み込まれるようになったようだ。そうした場面は演ずる役者にとっては腕のみせどころであつたろうし、観客にとっても最も見たい場面だったはずだから、安易とわかっているにもかかわらずにはゆかなかつたのであろう。

閑話休題、『定陽関』には曲辞やセリフに修正を指示する書き込みが残されているのだが、その修正された文言と一致する連台戯の劇本が現存していた。『西唐伝』頭段がそれである。ちなみに『定陽関』ならびに『西唐伝』頭段には鎖陽城ではなく定陽城(関)が見えており、『西唐伝』頭段には『定陽関』に登場しない太宗が登場していた。つまり『定陽関』は『西唐伝』に先立って存在し、『西唐伝』が依拠した太宗の登場しない劇本(のひとつ)だったのである²⁶(ちなみに『西唐伝』も哈密国に遠征しており、『定陽関』と同じ箇所「天井作下飛刀」とあつた)。『西唐伝』は頭、2、5、6、7、9の全6段が現存している(いずれも「旧大班」の印が捺される昇平署旧蔵の串関鈔本)。第9段の第10齣が「投誠凱旋」となっているから、この段が末段だったに相違ない(ちなみに連台戯の1段は通常8齣からなっている)。

七 『西唐伝』第2段と『鎖陽関』

『西唐伝』の頭段は単齣戯の『定陽関』を修正したものだったが、『西唐伝』をさらに修正した単齣戯も存在している。『鎖陽関』がそれである。『鎖陽関』は『西唐伝』の第2段を改めたものであつて、その第3齣「遣徒下山」を削除し、第7齣「金定尽節」と第8齣「重蹕蕩寇」を統合して第6齣「金定尽節」としたものであるが、単齣戯と連台戯の相違ゆえであらう、結末は異なっている。

『鎖陽関』には、傳惜華旧蔵で「即罵城」と注記される6齣總本(光緒22年昇平署抄本)、昇平署旧蔵の6出總本、『故宫珍本叢刊』所収の6出總講の三鈔本が現存しているが、字句はほぼ一致している(總講本のみ第6出に尾声がない)。よって以下ではこれらを区別せず単に『鎖陽関』と称したい²⁷。その劇情は以下のようになっている。

高麗遠征に参加すべく故郷を旅立った薛仁貴が宿を求めた屋敷の娘樊金定の婿に迎えられるが、従軍以後音信が途絶えた。金定はやがて生まれた子に景山と

²⁶ 柴崎公実子「薛丁山の小説と清朝宮廷演劇—劇本の比較を中心に—」(『中国古典小説研究』第18号所収、2014.3)を参照されたい。

²⁷ ただし『定陽関』の表紙には「月」とあり、『西唐伝』には「吉」とあるから、両者が同じ旧大班でも異なるグループで演ぜられていた劇本である可能性は残る。なお『定陽関』にはほかにも「曲詞十九種」所収鈔本、皮簧總本鈔本(いずれも呉曉鈴旧蔵)があるが、前者は第1出を欠くゆえ、後者は皮簧の鈔本ゆえ、ここでは論じない。また題綱のみ残る『西異伝』のなかに『鎖陽関』と同一内容と思しきものがあるが(『故宫珍本叢刊』第691冊所収)、他の『西異伝』の題綱との関係が不明ゆえ、やはりここでは論じない。

名付けるが、七歳のおり狂風にさらわれ行方不明となる。十年後、長眉老祖のもとで武芸を修めていた景山が生家に戻り、鎖陽関に閉じ込められている父の救出にゆくと言べる。金定もこれに同行する。景山が敵の包囲網を突破して鎖陽城下にいたりその生い立ちを述べるが、軍規違反に問われることを懼れる仁貴は、景山はもとより妻金定の存在まで否定する。自ら鎖陽城下にでむきその不人情を知った金定は憤って自刎し、事情が明らかになったことで仁貴は処罰される。以上が仁貴、金定、景山に注目した劇情のあらましである。

曲牌、曲辞、曲韻などの比較から、『定陽関』の場合とは逆に、『西唐伝』第2段を修正したものが『鎖陽関』とわかる²⁸のだが、上記の『鎖陽関』の三鈔本のいずれにも旧蔵印は捺されていない。よって『鎖陽関』は昇平署成立以後のものであり、『西唐伝』はそれに先立ち、旧大班において『定陽関』の串関や現存の『鎖陽関』に先行して成立していた劇本（ここでは原『鎖陽関』といっておく）などにより連台戯として構成されたものであろう。しかも『定陽関』には太宗が登場しないのに、『西唐伝』では頭段から第9段まで「貞観」が登場している（と思しい）。この点に鑑み、筆者は『定陽関』については康熙末年以降乾隆前期の乾隆帝親征以前の成立を²⁹、『西唐伝』についてはそれ以降の乾隆帝在位の嘉慶初年までをその成立時期に考えている。

前述のごとく、『西唐伝』の頭段は『定陽関』に登場しない太宗を登場させるが、それ以外は『定陽関』を襲い、薛仁貴と柳氏の子丁山が仁貴救援にやってくる経緯を演じていた。これに続く『西唐伝』の第2段は、これまた既述のごとく、仁貴に婚姻の事実を否定された樊金定が子の景山の目前で自尽するという衝撃的な劇情を演じていた。景山は異母兄の丁山とともに『西唐伝』では最後まで登場し仁貴を補佐している。だが丁山ともども目立った活躍はしておらず、樊金定を自尽させてまで景山を登場させ、従来とまったく異なる薛仁貴を演じさせる意図がどこにあったかわかりにくい。そもそも樊金定や景山はどこからきたのか。

景山の景は丙に通ずるから³⁰、その名が丁山にちなんだものであることに間違いはなく、丁山の単純な分身といってよからう（『説唐後伝』によれば丁山は山西の山の名であるという）。しからば薛仁貴に柳氏とは別の妻がいるなら子もいて当然として、響きと字面のよい景山がその名に選ばれた可能性はあろう（ちなみに宮中の戯班は南府と景山に置かれていた）。ひるがえって樊金定であるが、『西唐伝』第2段（と『鎖陽関』、以下同様）以外の清朝宮廷演劇には登場しないから、『西唐伝』（ないしは原『鎖陽関』）の時点で初めて薛家将物語に組み

²⁸ 以上は前掲註26の柴崎論文による。

²⁹ 乾隆帝は乾隆51年に哈密北部の天山の頂に関帝廟を建てたが、その地は唐の貞観14年に侯君集が高昌を平定した際に記功碑を立てた地という。薛仁貴が哈密遠征をするという設定にはそれなりの歴史的背景があったのである。なお『西唐伝』の頭段、第2段ともに哈密国への修正はおざなりで、形式的な修正といっても差し支えないものであった（そもそも涼が韻字となっている曲辞もあったから、完全な修正は望むべくもなかったろうが）。安殿本の場合はいざ知らず、現存する実用に供された劇本にあっては以下同様という了解のもとで修正の手を省いた可能性があろう。いずれにせよ『西唐伝』の成立は乾隆51年の直後だったのではあるまいか。原『鎖陽関』が存在していたなら、その遠征先は西涼（遼）だったはずである。

³⁰ 洪邁の『夷堅志』は丙集とするところを趙昂の諱を避け景集としている。

込まれた人物であって、こうした形での登場と退場が予期に反して不評だったため、組み込むこと自体断念された人物だったのではあるまいか。ではそうした人物が樊金定と命名されたのはなぜか。

八 『西唐伝』と説唐シリーズ

唐代を扱う歴史小説に、明代の主に嘉靖から万暦にかけて刊行された、薛仁貴征東の物語などを取り込みつつ史実に近づけた作品（演義小説）と、清代の乾隆年間に続々刊行された、物語にさして変更を加えずそのまま文字化した作品（物語小説）があり、前者のうち薛仁貴征東の物語を組み込んだものに『唐書志通俗演義』や『隋唐兩朝志伝』があることは既述したが、後者の、薛家将物語を中心にすえたものに、説唐シリーズの『説唐後伝』ならびに『説唐三伝』があった（薛家将物語がつとに巷間に流布していたとしても、演義小説がそれをそのまま組み込むことは出来なかったはずである）。この二作品は『説唐全伝』を承け『粉粧楼全伝』に続くものであった。

『説唐後伝』に、山西の龍門県に募兵のため遣わされた張士貴が、娘婿何宗憲を白袍将に仕立上げるため、薛仁貴の応募を2度に亘って拒んだだけでなく、秘かにこれを始末しようとするが、そのたびに援助者が現れ、最後は薛仁貴が窮地を救った程咬金の令箭が決め手となり従軍できたという一段がある。その間にあって、仁貴が風火山の山賊から救い後日を約した相手が樊家荘の樊洪海の娘繡花であった。樊繡花は仁貴が衣錦還郷したと聞き、十三年後、両親ともども平遼王府を訪ね、第二夫人となった。この樊繡花が樊金定の祖形だったに相違ない³¹。

説唐シリーズは当然『説唐全伝』、『説唐後伝』、『説唐三伝』、『粉粧楼全伝』の順に刊行されたはずであるが、すべてに刊行年のわかる原刊本が現存しているわけではない³²。だが『西唐伝』の樊金定が『説唐後伝』の樊繡花を祖形としつつそれに変更を加えたものであるなら、『西唐伝』が乾隆の後期以降（道光7年以前）に成ったものであることは認めてよいことになる。ただこれと逆に『西唐伝』が『説唐後伝』に影響を与えることも考えられるから、両者の間におきたとみられる変更が双方向的なものなのか否かが検討されなければならない。ついてはそこに加えられた変更が真に創作といえるものなのか、すなわちそれにも先行する祖形がなかったかを検討する必要がある。

ここでこれまでと異なる視点から『説唐後伝』をみてみたい。『説唐後伝』全55回は後日分割され、その前半三分の一については『説唐小英雄伝（羅通掃北）』

³¹ 『西唐伝』第2段で「成親之後、身染重病、老漢請医調治、我女慇懃侍奉、養病三月、方得痊癒、我女懷孕、仁貴従軍而去、到今一十七載、杳無音信」となっている金定の父樊仲賢のセリフが、『鎖陽関』では「自從従軍之後、到今一十七載、杳無音信」に改められ、仁貴が金定の妊娠を知っていたかが曖昧にされた。『説唐後伝』では後の婚儀を約したに過ぎず、『西唐伝』のごとき劇情には発展しえないから、景山は『西唐伝』（ないしは原『鎖陽関』）が意図して薛家将物語に登場させた人物ということになる。

³² 『説唐全伝』の現存最古の刊本は乾隆48(1783)年の重刊本であるが、『説唐後伝』のそれは乾隆33(1768)年、『説唐三伝』は乾隆42(1777)年、『粉粧楼全伝』は嘉慶2(1797)年の刊本である。しかれば『説唐全伝』には乾隆33年以前の刊本があったはずである。

全 16 回、それ以降については『説唐薛家府伝（薛仁貴征東全伝）』全 42 回として刊行されている（以後『説唐後伝』の「羅通掃北」部分を指したい場合は『説唐小英雄伝』，「薛仁貴征東」部分を指したい場合は『説唐薛家府伝』とすることにしたい）。前者の主人公は羅通であり，後者のそれは薛仁貴であった。ちなみに『説唐全伝』は羅通の父羅成を白虎星の下凡したものとし，『説唐薛家府伝』は白虎星が羅通の死後薛仁貴に乗り移ったことにより，それまで口が利けなかった薛仁貴の口が利けるようになった（一日睡在書房中，見一白虎揭開帳子扑身進來，吓得他魂飛天外，喊声“不好了。”纔得開口）が，凶神白虎の悪影響を受け，両親は数日のうちに亡くなったとする（白虎開了口，無有不死）。

『説唐小英雄伝』の羅通は北蕃により木陽城に閉じ込められていた太宗を救い，父の仇の蘇定方とその長子蘇麟を殺して仇討ちするが，次子蘇鳳を討ち漏らし，『説唐三伝』につながる火種を残したとする。この羅通に惚れ，敵方の公主でありながらその掃北に協力したのが屠炉公主であるが（ちなみに物語小説には敵方の女将が唐または宋の若武者に惚れ，これを陣前招親したあげく自国を裏切り父や兄まで殺すという物語素が頻用された），実弟の羅仁を殺したことを羅通に根に持たれ，太宗の命で祝言を挙げたその晩，その辱めの言葉に憤り，自刎して果てることになっていた。この羅通と屠炉公主の関係にいささか修正を加えて再利用したものが『説唐三伝』の薛丁山と樊梨花の関係である。丁山は梨花を度々拒絶するが，戦場で窮地に陥るたびにその援助を求めざるをえず，結句二人はまるく収まるとかわった。案ずるに，後日『説唐小英雄伝』が薛仁貴を主人公とする『説唐薛家府伝』と別行されたのは，上記のパラレルな関係が誰の目にも明らかだったからではあるまいか（説唐シリーズ間のこれ以外の類似点については後述する）。『説唐小英雄伝』の屠炉公主は『説唐薛家府伝』で樊繡花となり，『説唐三伝』でさらに樊梨花へと変わったのである。

『西唐伝』の樊金定が薛仁貴の不人情な態度に憤って自刎する劇情は，『説唐小英雄伝』の屠炉公主が自刎する情節を継承したものに相違ないものの，子まで生した樊金定を自尽に追い込む薛仁貴の卑劣さは，これを見る者の不興を買ったのであろう，まもなく樊金定そのものが薛家将物語から姿を消すこととなったことは既述の通りである。だが，一夜を共にし，後日の成婚を約した程度ならよかろうと考えたのか，この枠組みは薛仁貴と樊金定の高瓊君保と劉金定のそれにかえ，四門殺転との組み合わせもそのままに，『宋太祖三下南唐被困壽州城』に流用された。とはいえ従軍中に婚姻した事実を隠蔽するため，腕が立つとはいえ女将を四門殺転させては高君保の名折れとみたか，そのおり君保は人事不省だったとし，婚姻の事実を否認したのは人事不省から回復後のこととしている。この男将（この時点の薛仁貴は若武者とはいえない）の裏切りも物語素のひとつだったとみてよかろう。『宋太祖三下南唐被困壽州城』は咸豊 8(1858)年の紫貴堂蔵板が現存最古の刊本であるから，こちらに見えるものの方が後出とみてよかろう。なお樊金定の子の薛景山であるが，『説唐三伝』の，樊梨花の義子薛応龍に対応するかもしれない。薛応龍は薛丁山に樊梨花との男女の仲を疑われていた。

それでは『説唐三伝』と『西唐伝』のいずれが先に成立したのか。この点を考えるにあたっては，確認しておかねばならないことがいくつかある。よってここではその前提として，景山が仁貴に合流するまでの経緯をいま少し詳しくみてお

きたい。

景山は丁山と同様、仙人（長眉老祖）の意向により虎ならぬ風にさらわれ仙山で修業していたとされる。この点も景山が丁山のコピーだったことを強く示唆しよう。既述のごとく景山は『西唐伝』で鎖陽城の四門を殺転することを求められるのだが、四門殺転の物語は『故事』と『説唐薛家府伝』では秦懷玉が三江越虎城で求められた課題であり、『説唐小英雄伝』では羅通に課された課題であって、物語と物語小説にあっては時と所、主人公をかえて語り継がれる伝統的な課題であり、物語素だったのである。ただしこの課題が持ち出されるにあたっては、一定の条件が満たされる必要があった。皇帝が親征し（空城計により）辺境の城に閉じ込められ、若武者が単騎救援にやってくるがそれである。結果皇帝は唐の太宗から宋の太祖にかわり、城は三江越虎城、木陽城、鎖陽城、壽州城と、若武者は秦懷玉、羅通、薛景山、劉金定とかわったのである。なお女将の劉金定が若武者の隊列に加わるにあたっては、名を同じくする景山の母樊金定の影が揺曳しているとみなせる。劉金定は薛景山と樊金定が一体となったものだったのである（ちなみに物語小説で男勝りの女性の多くが金定と命名されているのは、金童玉女（金童と関係しよう）。『西唐伝』の成立時期は『宋太祖三下南唐被困壽州城』のもととなった物語が巷間で語り始められる以前だったはずである。

九 『征西異伝』と『西異伝』

言帰正伝、『西異伝』を銘打つ六齣からなる題綱に、齣名及びその登場人物を『鎖陽関』と同じくするものがある（『故宫珍本叢刊』第 691 冊所収）。題綱ゆえ細部の劇情まで一致するかは確言出来ないが、『鎖陽関』に『西異伝』の別名があった可能性を示唆するものとして見逃せない。ただし昇平署旧蔵の『西異伝』と題される題綱には『金貂記』の単齣戯と思われるもの³³や、『鎖陽関』、『金貂記』のいずれとも異なる連台戯『西異伝』のものも存在するからやっかいである。以下ではまず後者について述べよう。

後者には、2、3、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、18、19、20、21、22、23、24、25 の全 23 本の題綱と、これと一連のものと思しい「西異伝」、「改西異伝諸路合師」を銘打つ題綱がある。これらはいずれも 1 から 4 の出からなる本を構成単位としており、清朝晩期、おそらくは光緒年間のもものと推定される³⁴。この第 25 本が連台戯『西異伝』の末尾かはさだかでないが、それ以前の登場人物、薛仁貴、薛丁山、樊梨花、薛金蓮、竇一虎、竇仙童、薛応龍、蘇保童などからみて、連台戯ではあっても既述の『西唐伝』ではなく、以下で紹介する『征西異伝』の題綱だったとみなせる。というのも、『故宫珍本叢刊』第 689 冊に 3 ないし 4 齣からなる『征西異伝』³⁵及び『西異伝』の曲譜が蔵されている

³³ 全六齣からなり、齣名は順に、朝鮮遊獵、神算遣徒、梨花操演、巧遇良縁、棄暗投明、截賢大戰となっている。

³⁴ 拙論『鉄旗陣』と『昭代簫韶』（埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第 10 号所収、2013.3）を参照されたい。『清朝宮廷演劇文化の研究』（勉誠出版、2013.12）所収のものはこの修正増補版である。

³⁵ 「征西異伝」と題される曲譜は頭本ただひとつであり、4 齣からなり本を構成単位とする。「西異

のだが、そのうちの『西異伝』の曲譜のすべて、すなわち 2、4、5、8、12、14、16、20、21、22、25、27、28、29、30、31 の全 16 本のうち、第 30、31 本の曲牌と曲辞が、現存する連台戯『征西異伝』第 16 段のそれに合致するからである。

さて肝心の連台戯『征西異伝』であるが、現存している段は、2、3、13、14、16、17 の 6 段で、第 17 段の第 8 齣を「御帳完婚」とする。いろいろ経緯のあった薛丁山と樊梨花が挙式する場面であるから、ここで完結していた可能性が高い。ただし第 2、3 段が 6 齣、第 13、14 段が 4 齣、第 16、17 段が 8 齣と、段内の齣数が統一されておらず、出自が複雑であることを窺わせる。太宗は薛仁貴とともに哈密国に遠征し鎖陽城に閉じ込められるが、その包囲が解かれるや都にもどってしまう（ことになっているようだ）。連台戯『西唐伝』と同様全体の一部しか残っておらず、断定は憚らざるをえないが、敵対者は蘇保童で、仁貴の子丁山と樊梨花に加え、『西唐伝』では景山の妻であった寶金蓮にかわり、丁山の妻寶仙童と陳金定、妹の薛金蓮が登場する。『西唐伝』第 2 段に登場した樊金定、薛景山は登場しないが、そこで寶金蓮の兄として登場し、以後も土行の矮人として大活躍する寶義虎が寶一虎として薛金蓮の夫となっていた（ちなみに清朝宮廷演劇に土行の矮人が必ずと言ってよいほど登場するのは、それが上演された三層の戲台の地井を活用するためであったろうが、そもそも『封神演義』の土行孫の形象を襲ったものであり、さらに言えば孫悟空などに代表される小さ子の系譜を引くものであった）。

この『征西異伝』、『説唐三伝』の第 45 回「樊梨花登台拝帥 薛丁山奉旨完婚」までを全 16 段の連台戯としたものと思しく、別名に「異説」を冠するものがあったように、それ以前に存在した別バージョンの薛仁貴征西の物語を改めたものであったと思われる。

登場人物のみ記した題綱と、曲牌、曲辞のみ記した曲譜（しかもともにすべてが残っているわけではない）を同一の連台戯のものと断ずることは難しいが、双方に現存している本の出数は一致しているから（2、5、8、12、14、16、20、21、22、25）、題綱と曲譜が同一の連台戯『西異伝』のものである蓋然性はみとめられる。しかも曲譜、少なくともその 30、31 本の曲譜については連台戯『征西異伝』第 16 段のものと同一であるから、連台戯『征西異伝』は当初 8 齣 1 段の構成であったが、後日 3 又は 4 出 1 本に改められ、名についても『西異伝』と改められたとみてよからう。

ひるがえって、先に出自が複雑であることが窺われるとした『征西異伝』の 4 齣からなる第 13 段であるが、表紙には「十三段征西異伝八齣總本」の横に「廿四本旧十三段一二出」とあった。しかもこれと 4 出からなる「西異伝題綱」24 本の登場人物が登場順を含め完全に一致していた。この第 13 段は段が構成単位だった時期の劇本をそのまま使い回したものであったのである（附記のない第 14 段も同様であった可能性がある）。さらに「七段」を銘打ち 6 齣からなる『征西異伝』の題綱も現存していた。連台戯『征西異伝』には各段 8 齣からなる時期に続き、各

伝頭本」を銘打つ曲譜が『故宮珍本叢刊』の第 689 冊に収められていない以上、この『征西異伝』が光緒時期の『西異伝』の曲譜である可能性はあろう。『征西異伝』は『西唐伝』の改作であって、後に再度『西異伝』と改名されたのではあるまいか。

段6齣、又は6齣ないし8齣からなる時期もあったようだ。

薛仁貴征西の物語を演ずる清朝宮廷連台戯は、当初『西唐伝』を銘打ち全9段74齣からなっていたが、後にこれと劇情の異なる全17段136齣からなる『征西異伝』にかわり、次いで段ごとの齣数を一部ないし全部減らしたものとなり、最後に段を本、齣を出とし、1本の出数を1〜4出、全体で31本以上からなる『西異伝』（出数不詳）となったようだ。案ずるに、この『西唐伝』が『征西異伝』に置き換えられるきっかけとなったのが『説唐三伝』の流布であったろう。三種の連台戯、『西唐伝』、『征西異伝』、『西異伝』について、筆者は連台戯『西唐伝』→連台戯『征西異伝』→連台戯『西異伝』の順に成ったと考えている。

十 説唐シリーズの刊行

これまで清朝の宮廷演劇における薛家将物語の変遷状況を追ってきたが、それと深い関わりのある説唐シリーズの薛家将物語には必要以外触れないようにしてきた。だが薛家将物語を論ずる際に説唐シリーズを避けて通るわけにはゆかない。最後にまとめて両者の関係につき言及することにしたい。

説唐シリーズは『説唐全伝』に始まる。『説唐全伝』は『説唐前伝』、『新刻増異説唐全伝』とも題されるが、前者は『説唐後伝』刊行以降にそれとセット販売を目論んだ書肆による改名、後者も、同じく「新刻増異」を角書する『説唐後伝』に倣った誇大広告と思しく、『説唐全伝』については「増異」の実態はなさそうである。

先に『金貂記』における薛仁貴の敵対者鉄勒金牙について論じた際、それが『功臣宴敬徳不服老』雑劇の鉄肋金牙に淵源し、後に『定天山』で鉄勒島の金勒、銀勒、烏賽神、さらに海島の金勒、銀勒、鉄勒とかわったこと、鉄勒はチュルクであろうと述べたが、『説唐小英雄伝』で羅通が闘う相手も鉄雷金牙、鉄雷銀牙、鉄雷八宝となっていた。鉄勒の勒はleだが、肋（と肋）にはleとleiの二音があり、leiは雷の音だから、鉄雷もチュルクに淵源しよう。『説唐小英雄伝』に天山への言及はないが、それが薛仁貴征東の物語の影響を承け、連台戯の『金貂記』や2巻本ならびに連台戯の『定天山』と同じ頃、羅通という新たな英雄（とそれにまつわる様々な因縁）のもとに、史実の鉄勒の居住地に近い北蕃を舞台とし新たに「創作」された物語小説であることに間違いはなさそうである。

『説唐小英雄伝』のあらすじについては再説しないが、つとに『大唐秦王詞話』や『唐書志伝通俗演義』が刊行されていた、『説唐全伝』の唐の太宗即位までの物語や、『事略』が存在し『故事』も刊行されていた、『説唐薛家府伝』の薛仁貴征東の物語と異なり、『説唐小英雄伝』には先行する物語が現存していないし、その存在を示唆する資料も残っていないことは注意されてよい。既述のごとく、物語が文字化され今に残されるか否かは多分に偶然に左右されるところがあるから、羅通掃北の物語が『説唐小英雄伝』以前に存在していなかったと断ずることは出来ないのだが、『唐書志伝通俗演義』という、唐の太宗即位までの物語の直後に薛仁貴征東の物語を続ける前例があったのに、鴛湖漁叟がその間に『説唐小英雄伝』を挿入するかたちで『説唐後伝』を構成・刊行したのはなぜか。

これも既述のごとく、『説唐薛家府伝』には羅成となって下凡した白虎星が羅成の死後薛仁貴に乗り移ったとの記載があった。『説唐小英雄伝』の主人公羅通は掃北の功績者屠炉公主との婚姻を拒み通し、結句これを憤死させたため、太宗から「到老不許娶妻」を命ぜられることも既述した。羅通はその後『説唐薛家府伝』において、説唐シリーズのトリック・スター程咬金の計らいにより、醜女の史大奈の女との婚姻を許され、二人の間に生まれた羅章が『説唐三伝』で活躍することになっている。羅通が父の仇蘇定方の次子蘇鳳を討ち漏らしたため、西遼（西涼、哈密）の軍師となったその子蘇宝童が国王を唆し、『説唐三伝』の太宗親征が始まることも既述した。しからば『説唐小英雄伝』は説唐シリーズの要石として、『説唐全伝』と『説唐薛家府伝』の間に配置されたに相違ない。

ひるがえって、『説唐小英雄伝』で太宗が閉じ込められる木陽城であるが、そこに閉じ込められた太宗が糧草に窮した際、空から真っ黒になって老鼠が落ちてきて地にもぐっていったとされる。太宗に同行していた徐茂功はこれを見て、天が黄糧を賜ったのだと次のように述べた。

前年西魏王李密、納愛蕭妃、屢行無道、後來忽有飛鼠盜糧、把李密糧米尽行搬去、却盜在木陽城內、相救陛下、特獻黃糧（『説唐後伝』第5回）。

ここで言及される金墉城での異変を描いているのが『説唐全伝』の第43回であって、そこには以下のような記述があった³⁶。

時值金墉大荒、米貴如珠、李密欲結民心、以為内助、下旨開倉給粟、濟餓民之難。不料開了東倉倉官門、只見許多怪物、形如老鼠、兩肋生翅、吱吱的叫、一片聲響、滿倉飛出、成隊而去、米糧全無一粒。倉官忙奏魏主、那魏主大驚……看官、你道這個是什麼東西、如此作怪？這個名為飛鼠。搬運皇糧十五萬石、原來自有着落的。到後來尉遲恭兵下荊州、被水圍在樊城、缺了糧草、却在城上掘蒿為食、不意之中、掘出三萬皇糧、救了衆軍性命、又有秦叔宝掃北、兵圍牧羊城、掘得三萬石充餓、又有唐天子跨海征東、被困在三江越虎城、得了三萬石、還有六萬石、直到宋朝楊六郎兵困幽州、楊七郎一箭射下月光、得了這六萬石、此是後話、今且休提。

同様の記述は『大唐秦王詞話』第9回にも見えるが、「看官」以下に相当する部分がそこにはなかった³⁷。この「看官」以下の部分は、講釈師が聴衆に語り掛ける口頭の語りものの形式を借り、あらかじめ聴衆（ないし読者）に今後の物語の展開を示唆したものであるが、そこで述べられる「秦叔宝掃北、兵圍牧羊城、掘得三萬石充餓」こそが『説唐小英雄伝』の先の引用に対応する部分であった。これにより『説唐全伝』と『説唐後伝』が当初から一体のものとして構想されていたことがわかるのだが、その点についてはここでは論じない³⁸。

³⁶ 『説唐全伝』、『説唐後伝』の引用はいずれも『古本小説集成』所収の觀文堂本によった。

³⁷ なお『大唐秦王詞話』には飛鼠のみならず、これを退治すべく倉庫に放された猫までが穀物を喰ったとの記述はあるが、飛鼠により別所に運ばれ後日に備えられたとはされない。

³⁸ なお金墉城から消えた十五萬石の皇糧の行方であるが、「後來尉遲恭兵下荊州、被水圍在樊城、缺了糧草、却在城上掘蒿為食、不意之中、掘出三萬皇糧、救了衆軍性命」ならびに「唐天子跨海征東、被困在三江越虎城、得了三萬石」とされる分については、それぞれ『説唐全伝』と『説唐薛家府伝』に該当する部分がなければならないのだが、楊家将物語にあるべき「宋朝楊六郎兵困幽州、楊七郎一箭射下月光、得了這六萬石」とともに、現存する作品には見あたらない。

ここで論じたいことは二つある。その第一は、『説唐小英雄伝』の木陽城が『説唐全伝』では牧羊城となっている点である。木と牧、陽と羊はそれぞれ音を同じくする。『説唐全伝』で牧羊城が言及されるのはここ一箇所のみだが、木陽城は『説唐後伝』でたびたび言及され、すべてで木陽城になっている。既述のごとく『説唐後伝』が『説唐全伝』以前に刊行されることは考えにくい。しかも『説唐全伝』と『説唐後伝』はともに鴛湖漁叟較訂を銘打たれている。しからば『説唐全伝』でひとたび牧羊城と表記したものを、鴛湖漁叟が『説唐後伝』で同音の木陽関に改めたとみてよかろう。ではなぜそのように表記をかえたのか。

北蕃で牧羊といえば、漢の武帝当時、匈奴の捕虜となり北海（バイカル湖）のほとりて羊飼いをさせられた蘇武が思い出されよう。『説唐後伝』での羅通の敵対者は蘇定方、『説唐三伝』での薛仁貴の敵対者はその孫の蘇宝同であった。蘇宝同は架空の人物であるが、蘇定方(592-667)は唐の高宗の時代に百済を滅ぼし、吐谷渾遠征でも活躍した実在の将軍であったが、説唐シリーズで描かれるがごとき人物ではなかった。それどころか『大唐秦王詞話』第52回「識天時賢母訓子 全孝道義士降唐」では孝道を全うした義士とされており、本来は王陵³⁹や徐庶⁴⁰に連なる人物だったはずであった。母を捕え、孝に訴えて有能な人物を帰順させようとするのは実際にもおこなわれたであろうが、物語に頻見するから、これも物語素のひとつだったに相違ない。

言帰正伝、しかく『大唐秦王詞話』では孝子で義士だった蘇定方がなにゆえ『説唐全伝』では羅成、羅通親子の引き立て役の悪玉となったのか。楊家将物語での潘仁美がそうであったように、蘇定方が悪人だった事実は史書からは確認されない。では数ある将軍のなかから蘇定方（や蘇保童）が羅通（や薛仁貴）の敵対者に指名されたのはなぜか。案ずるに、それは蘇定方が蘇武と同じく蘇姓だったからに相違ない。それゆえ太宗が空城計により閉じ込められる城は牧羊城でなければならなかったのである。とはいえ牧羊城では舞台裏が見え見えと判断した鴛湖漁叟が、続篇の『説唐後伝』ではそれを同音の木陽城と改めたのではなかったか。それなら遡って『説唐全伝』の牧羊城も木陽城と改めるべきであったのだが、おそらく版木がすでに手元になかったか、埋木改刻の手間を惜しんだかの理由で、そのままとなったのではなかったか。

次に論ずべきは、牧羊城で三万石の皇糧を掘り出す掃北の大将が『説唐全伝』では秦叔宝となっている点である。これは『説唐全伝』執筆時点の鴛湖漁叟には掃北の構想はあっても、その主人公については秦叔宝が予定されており、羅通ではなかったことを意味しよう。そもそも掃北の物語はそれまで存在していなかったと思しい。鴛湖漁叟は、もともと李密に天下統一の資格がないことを示すべく、つとに説唐の物語に導入されていた飛鼠や猫が皇糧を喰い尽くしていたとする物語を、後日窮状に陥る運命にある天子（またはその意を体した将軍）を援くべく天が予め飛鼠に命じて皇糧を搬運備蓄させたと変え、それに対応する一連の新たな物語を創作して既存の物語に嵌め込むつもりでいたようだが、結局『説唐小英

いようである。

³⁹ 『漢八年楚滅漢興王陵変(漢将王陵変)』を見られたい。

⁴⁰ 『三国志通俗演義』第36回を見られたい。

雄伝』を除きそれは構想のままに終わり、実現はしなかったと思しい。

ひるがえって、『説唐全伝』と『説唐後伝』の編者鴛湖漁叟は、前者のもととなった唐の太宗の建国物語、すなわち「紫微星が再度唐の太宗李世民となって下凡する際、紫微星が先に後漢の光武帝劉秀となって下凡した際、これを援けようとともなって下凡した二十八宿を、酒に酔って殺してしまった。これに遺恨を抱いた二十八宿が、語らって二十八反王となって下凡し、紫微星の天下統一の邪魔をする」という物語⁴¹に、薛仁貴征東の物語（ならびに羅通掃北の物語）を繋げて一貫した物語小説として構想するに際し、その構想を無理なく実現すべく、先に挙げた『説唐後伝』第5回の文章を挿入したに相違ない。

そもそも紫微星が下凡して天下を統一するとの発想による物語は、後漢の光武帝劉秀や唐の太宗李世民のみならず、宋の太祖趙匡胤にも存在していた。ただ、先の両者ほどにはあからさまに語られていないためわかりにくくなっているものの、趙匡胤を天帝の命を受け下凡した赤鬚火龍、その天下統一を輔弼した鄭恩を黒虎星とし、鄭恩がうやむやのうちに趙匡胤に殺され帰天するとされることに、先の物語の痕跡が残されていた⁴²。

小 結

最後に乾隆33年以前に原刊本が存在したはずと推した『説唐全伝』の成立時期について考えてみたい。先には述べなかったが、『説唐全伝』には乾隆元(1736)年の如蓮居士の序が冠されていた。よって原刊本の刊行時期についてはこのころまで遡る可能性を認めてよかろう。ではその成立時期はどうか。

『説唐全伝』は『説唐後伝』とともに「鴛湖漁叟較訂」が銘打たれていた。この「較訂」は校訂であり「校」の字を避諱したものとみなせる。校の字を諱にもつ皇帝は清にはおらず、明の天啓帝熹宗朱由校まで遡る。明の皇帝の諱を避けているなら、『説唐全伝』、『説唐後伝』とも明の天啓(1621-27)、崇禎(1628-44)の両朝、ないしは南明時期(1645-1648)に校訂され、一度は刊行されたかそのまま筐底に蔵されていたかは不明ながら、文字の禁が緩んだ乾隆年間になって（再度）出版されることになった可能性もなきにしもあるまい。

仮に『説唐全伝』と『説唐後伝』をめぐる出版状況がこのようであったとしたら、清の順治(1644-61)、康熙(1662-1722)、雍正(1723-35)の三朝にあってそれが巷間に流布していた可能性は無視してよかろう。したがって、そこに見える物語が

⁴¹ 朱凡「『王莽趕劉秀』伝説的分析」（『俗文学論集』所収、聯経出版事業公司、1984.11。原載は『中央研究院民族学研究所集刊』第23期所収、1967）、小松謙「劉秀伝説考」（『未名』第9号所収、1991.3）、「両漢をめぐる講史小説の系統について—劉秀伝説考補論—」（『未名』第10号所収、1992.3）、ならびに拙論「漢の物語から唐の物語へ—『三国志平話』をめぐる—」（『中国通俗文芸への視座—新シノロジー・文学篇』所収、東方書店、1998.3）を参照されたい。なお小松論文は小松謙『中国歴史小説研究』（汲古書院、2001.1）の第二章から第四章に再編して収められている。

⁴² 拙論「宋太祖趙匡胤をめぐる清朝宮廷連台戯」（埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第11号所収、2014.3）を参照されたい。

清朝宮廷の連台戯に影響を与えたように見えるとしたら、それがおこったのは乾隆以降のこととみてよいことになろう。さらに、明末清初から乾隆年間にいたるまでは優に人の一生の時間を超えているから、『説唐全伝』は別として、『説唐後伝』については鴛湖漁叟の名を借りた別人による続作の可能性も考えておく必要があるかも知れない。それなら先に述べた『説唐全伝』第43回の構想が『説唐後伝』で実現しなかったことに説明がつかう。ただ『説唐全伝』内でも構想が実現していない事実もあるから、『説唐全伝』の成立から出版までの間に書肆の老板（たとえば如蓮居士）などによる修正の手が加わっていた可能性も考えられよう。

というわけであるから、これ以後は説唐シリーズを構成する『説唐全伝』、『説唐後伝』、『説唐三伝』、とりわけ後二者や、薛丁山の子薛剛や薛強、孫の薛交の活躍する『異説反唐演義全伝』などにおける薛家将物語の発展を論じなければならないのだが、すでに予定の紙数を大幅に超過してしまった。よってこれらの検討については機を改めることにしたい。

最後に、本論で論じた薛家将物語を構成する諸作品のおおよその成立時期⁴³を一覧表の形で示しておく。就いて参照されたい。

補記 2000年以降、清朝宮廷演劇に関係する機関所蔵の文献や档案、戯曲研究者が蒐集所蔵していた戯曲を影印する大規模な叢刊が続々刊行された。以下に本論で言及した、それらに収められる薛家将物語関連の伝奇、連台戯、単齣戯を挙げておく(題綱や曲譜は省いた)。また筆者未見の『故宮博物院藏清宮戲本叢刊(上編)』(故宮出版社, 2015.8)、夙に刊行されていた『古本戯曲叢刊』初集(上海商務印書館, 1954)も言及を省いた。

故宮珍本叢刊, 海南出版社, 2000.6

鎖陽関(第664冊)、金貂記2段8齣(第669冊)

經中吳氏藏抄本稿本戯曲叢刊, 学苑出版社, 2004.3

金貂記伝奇2巻34齣(第8冊)、鎖陽関(曲詞十九種)(第29冊)

金貂記八齣(第30冊)、鎖陽城(旧抄皮篋総本九種之一)(第36冊)

傳惜華藏古典戯曲珍本叢刊, 学苑出版社, 2010.4

鎖陽関(第130冊)

中国国家図書館藏清宮昇平署档案集成, 中華書局, 2011.5

金貂記8齣(第58冊)、征西異伝2、3、14、13、16、17段(第60冊)

唐伝(建王言婚等八齣、国戚郊遊等八齣、大擺五行等八齣)(第66冊)、定陽関8齣

鎖陽関6齣(共第69冊)、西唐伝 頭、2、5、6、7、9段(第70冊)、定天山8齣(第92冊)

俗文学叢刊, 第1輯～第5輯, 新文豊出版社, 2001.10-2005.9

定天山8齣(第66冊)

⁴³ 先に『説唐三伝』の後半を詳説したと思ひと述べた『異説反唐演義全伝』につき、『首都図書館蔵中国小説書目初稿(五四以前部份)』(1960.9)は「清干(ママ)隆二一年刊俗本(甲三3)」を著録する。この記載が事実なら、『説唐三伝』のみならず、『説唐後伝』の刊年についてもこのこれ以前に遡る可能性がでてくることになるのだが、一覧表の『説唐後伝』、『説唐三伝』の刊行(成立)時期については、確認されている現存最古の刊本の刊行年に従うことにした。

薛家将物語関連一覧表																												
王朝	元			明								清												民国				
年号				洪武	永楽		成化	嘉靖		万暦	天啓	崇禎	順治	康熙	雍正	乾隆					嘉慶	道光	咸豊					
								32		21	47			34		1	11		33	42	51	2	18	7	8	10		11
関連事項														～楽府考略				九宮大成南北詞宮譜	昇平宝筏四色鈔本		天山山頂に關帝廟		昭代簫韶朱墨套印本	昇平署成立				
演義小説								唐書志伝通俗演義				隋唐兩朝志伝		褚人穫隋唐演義														
物語小説含俗文学					～薛仁貴征遼事略			唐薛仁貴跨海征遼故事				～大唐秦王詞話	～説唐演義全伝成立？				説唐演義全伝？		説唐演義後伝	征西説唐三伝		粉粧楼全伝			宋太祖三下南唐被困寿州城	瓦崗寨演義全伝		
雑劇					～賢達夫龍門隠秀																							
伝奇								～薛仁貴跨海征東白袍記	～薛平遼金貂記					康熙				乾隆				嘉慶	道光					許飲流校訂本金貂記
清朝宮廷戯																		定天山～										
																		連台戯金貂記 A、B			連台戯金貂記 C、Da～Dc							
																		定陽関 原鎖陽関							鎖陽関			
																				連台戯西唐伝			連台戯征西異伝		連台戯西異伝			
～○:この年または時期までに成立(刊行) ○～:この年または時期以降に成立(刊行)																												

～○：この年または時期までに成立（刊行） ○～：この年または時期以降に成立（刊行）

薛家将物语的生成与发展

——以与清朝宫廷演剧的关系为中心——

大塚秀高

以薛仁贵的‘征辽’为主题的物语，在其开始发展时，只其一部分由杂剧形式留下文字来。但是到了明代，用近似口头物语语言的‘小说’形式，出现其全貌。《薛仁贵征辽事略》、成化说唱词话的《唐薛仁贵跨海征辽故事》就是。可是以后的薛仁贵物语，编入到以物语接近到史实而讲说王朝兴亡史的演义小说，失却其精彩。正在其时，以薛仁贵为主人公的物语在‘传奇’中发现其发展的余地，新创造仁贵的儿子丁山等，开辟了后来成为薛家将物语的新的境界。《金貂记》、《定天山》等就是。在此时流中，清朝宫廷的连台戏引进许多物语素而演剧富于变化的薛仁贵和其一族的物语。于此同时，物语小说的出版盛行起来，继承以唐太宗统一天下为内容的《说唐全传》，出版了以薛仁贵和其子孙为主人公的《说唐后传》和《说唐三传》等。

关键词：薛仁贵、薛丁山、薛家将物语、物语素、连台戏